

日本とアメリカの野球場の立地及び形状の比較研究

A comparative study of location and shape of baseball stadiums between Japan and the United States

1K10C114-4 小野 祥輝
主査 石井昌幸 先生 副査 原田宗彦 先生

【はじめに】

近年、メジャー・リーグで活躍する日本人選手が増えている。大変喜ばしいことではあるが、スター選手の流出が日本プロ野球の人気低下につながるものが危惧されている。それに加え、日本野球機構による統一球問題の一連の対応は選手並びにファンの信用を失う結果となった。日本プロ野球界は変革の時を迎え、新たな改革策を提示し実行していくことが求められる。その中において野球場に改善の余地があると感じ、本場アメリカの野球場を事例に日本との比較を行った。

アメリカには「古き良き時代」の雰囲気を持った、それでいて合理化を追求した洗練された球場が数多く存在する。一方で日本の野球場は画一的な造りの球場が多く、これといった特徴を欠いている。日・米両国の野球場変遷を明らかにし、日本の野球場の問題点を提示することで、これからの野球場建設のあり方を示していきたいと考えている。

【第1章】野球の歴史

野球の出自に関しては今なお正確な結論は出ていない。アメリカ陸軍少将であったアブナー・ダブルデーが考案したとする説、イギリスの古来スポーツである「ラウンダース」をルーツとする説の2つがあり、前者は矛盾点が多々あることから一笑に付されている。後者もヘンダーソンによる実証的な研究が行われているが、確実といえる根拠は出ていない。明確にされているのは1845年にカートライトによって今日的な形が確立されているということであり、約50年かけて現在と同程度のルールに至るのである。

南北戦争後、野球は全国的に拡大し、1876年には現在のナショナル・リーグが創設される。以後、野球賭博の横行や新興リーグの隆盛といった内憂外患に耐え、1900年、現在のアメリカン・リーグが創設され、その3年後にはワールドシリーズが開催されている。

【第2章】日本とアメリカの野球場の変遷

野球が誕生したとされる1840年代は球場といえる建造物は無かったとされ、広場にラインを引いてダイヤモンドを作る位だった簡単なものであった。1860年代に入ると観客と選手を隔てるフェンスが登場し、入場の際には料金を徴収したという記録が残されている。20世紀には二大リーグが誕生し、各チーム豪華絢爛な球場を建設

している。以降、アメリカ経済の成長やモータリゼーションの高まりによって、郊外に立地した多目的スタジアムがブームとなる。しかし、次第に彼らはかつて親しんだ「古き良き時代」の球場に野球らしさを求めるようになった。この「新古典式球場」が現在のメジャー・リーグ球場のトレンドとなっている。

日本の野球場もかつてはアメリカに引けを取らない広さを持つものであったが、戦後のボールとバッドの材質悪化が飛距離低下を招き、徐々に狭くなっていった。このため、現在でも野球規則に明記されている野球場規格に合致しない球場が見受けられる。

【第3章】日本の野球場の問題点

1981年にコミッショナー主導によるプロ野球本拠地球場の実測が行われ、7球場が改修を行った。フィールドの拡大により選手の技術向上が図られる一方で、飛ぶボールといった攻守のバランスの不均衡を促す道具の登場も見られた。

球場自体の拡大は土地が限られている市街地から郊外へと移転する要因となり、これが現在の野球場及びスポーツ施設が抱える問題点であるといえる。1946年から始まった国民体育大会により、スポーツ施設を一堂に構えることが可能な場所として郊外が選ばれたが、稼働率の低さから投下資本を回収できず、老朽化した施設が多く残っている。それに加え、昨今の経済事情、国や地方自治体における財政状況やその用途にも厳しい視線が向けられているとあって、スポーツへの投資は一層厳しいものとなっている。今後、新たに建設する際は綿密な計画を練る必要があり、「利用目的」、「球場の規模」、「建設地」の三点を重要テーマとして設定すべきであると考えている。

【おわりに】

日本の野球場もアメリカの野球場同様、安全意識の向上からフィールド部分にせり出した座席やネットの撤廃などファンの目線に立ったサービスが行われつつある。近年のプロ野球人気の低下からもこれらサービスを継続し、なおかつ、各チームが特徴を前面に出したイベントを常時行うことで差別化を図っていくべきである。エンターテインメント性を持ったアメリカの「ボール・パーク」から学ぶべき点は多いが、「日本らしさ」も創出することでより良い野球場へと生まれ変わるだろう。